

## 忘れられた叡智を求めて

第12回

6月12日、総理官邸において、一つの新たな試みがなされた。

それは、「自然エネルギーに関する総理・有識者オープン懇談会」と称する会合である。この懇談会には、有識者として、環境ジャーナリストの枝廣淳子氏、元サッカー日本代表監督の岡田武史氏。apbank代表理事の小林武史氏、ミュージシャンの坂本龍一氏、ソフトバンク社長の孫正義氏の5氏が参加し、総理を交え、いかにすれば自然エネルギーを普及することができるかを熱心に論じ合った。

しかし、これまで、総理と有識者の懇談会は数多く行われてきたが、この懇談会は、三つの点で、従来の懇談会とは異なるものであった。

第一に、この2時間の懇談

## ネット革命が生み出した参加型民主主義の新たな形

会の内容は、すべてネットによるリアルタイムでの動画中継が行われ、興味のある方は、誰でも参加できた。第二に、この懇談会では、総理と有識者が語った内容について、ツイッターを使って、誰でもコメントや質問を寄せることができた。第三に、寄せられた質問に対しては、懇談会の最中に、リアルタイムで司会から紹介され、総理や有識者が答えた。その三つの点で、この懇談会は、文字通り、新たな試みであった。

そして、この結果、懇談会には、延べ7万人の人々がネットに参加し、また、ツイッターでも、数千件を超えるコメントや質問が寄せられた。

さらに、この懇談会は、総理とメディアとの関係におい

ても、新たな試みとなった。

通常、総理に対するメディアの取材は、記者会見での質疑や、ぶらさがり取材での質疑、例外的に行われる個別インタビューなどが主な方式であったが、この「オープン懇談会」においては、ツイッターを通じてメディアから投げかけられた質問に対しても総理が答えるという、新たな方式を採った。

このように、今回、官邸が試みた「オープン懇談会」という方式は、ある意味で、総理、有識者、国民、メディアの「新たな対話の形」であるが、これは、「参加型民主主義」の新たな地平を切り拓く試みでもあった。

すなわち、民主主義とは、本来、代議制を通じて「共感できる候補者に一票を投票す



田坂広志

[内閣官房参与  
多摩大学大学院教授]

ること」ではない。こうした国家のビジョンや政策を論じる場に自ら直接参加し、様々な意見に耳を傾け、自身の意見を表明し、質問を投げかけ、質問に答え、意思決定に参加し、そして最後は、それぞれが、一人の国民として、この国を変えるために行動することと他ならない。

いま、ネット革命は、この本来の意味における「参加型民主主義」を可能にしつつある。されば、いま求められているのは、政治そのものが、その可能性を、様々な試みを通じて実現していくことである。

内閣官房参与として提言し、実現した、この「オープン懇談会」。このささやかな一歩が、大きな歩みへと結びついていくことを願う。